

5-03 離岸・着岸

エバ-フォント(Migu1c)×16pt 版、2018-9-29 更新

1 離岸

艇を浮かべて出発（離岸）する一例を説明します。艇を水面に浮かべたら、オールをオールロックに装着し、沖側のオールを出します。岸側のオールもセットし、転覆しないように気をつけながら、中央のステッププレートか沖側のレールに足をかけます。そしてシートに座り、シューズを履きます。岸にいる人にオールを押しもらって岸から離れる場合は、オールを押し合うようにします。慣れたら「けりだそう、1、2、3」などの指示で、岸をやさしく押しながら乗り込み、それからシートに座る方法もあります。最初は無理をしないようにしましょう。岸を離れたら、オールロック、リガー、スライドや各部の固定を確認します。特にオールロックは重要です。

流れに対しては「逆流で離岸」するのが基本です。順流では、岸に沿って流され、危険です。艇を栈橋に持っていくところで、すでに方向を考えておくべきですが、もしバウを下流に向けて浮かべた場合は、バックロウで岸から離れる方法もあります。

2 着岸

着岸の一例を紹介します。コックスの指示に従い、降りる用意をします。具体的には、オールロックのゲートを少しだけ緩め、シューズを緩め、靴下を脱ぎます。それから、流れの下流側から岸に接近します。つまり、逆流が原則です。岸に斜め約30

度程度の進入角度で、流れにあわせて艇速を調整します。速すぎても、遅すぎても、危険になります。岸に接近したところで、沖側のサイドがロウからバランスへ、そしてホールドをして、岸に平行にします。コックスの指示に従い、一人ずつ降ります。

補足 1：艇の状態をコックスからアナウンスしてもらう

離・着岸はコックスも忙しく、最小限の言葉で次々と指示が出ます。基本的にはそれに従えば良いのですが、視覚障害者にとって、艇全体の状況がどうなっているのか、解りにくく不安かもしれません。それは、心理的な問題であるというより、ボートの安全に参加できていないことを意味します。熟練したコックスは、艇がどういう位置にいるかなどもアナウンスし、クルー全員が安心して着岸操作に参加できるようにするでしょう。

補足 2：陸上からの補助

クルーは、自力で離・着岸できるようになるべきですが、安全を考え、無理せず補助者に協力してもらうことも大切です。補助者に手伝ってもらったら、忘れずにお礼を言いましょう。もし補助者がいても自力で着岸したい場合は、補助者とコミュニケーションをとりながら、補助の要否やタイミングを調整していきましょう。

陸上の補助者は、たとえパラ・ロウイングでも無造作に手を出さず、まずはクルーの技量と意思（自力でつけたいか手伝いを求めているか）を確認しましょう。手伝う場合は、ブレードの押し引きは、シャフトを水面とが平行になるように、心がけます。